
エリート キッズ

山本くるみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エリート キッズ

【Nコード】

N7324K

【作者名】

山本くるみ

【あらすじ】

ありきたりな紹介で申しないけど、とにかく平凡な僕。先輩の紹介で『青少年非行防止委員会』（いきすぎた子どもの非行をどうにかするための警察組織）に入ったのはいいけど、そこで仕事をしていたのは…青少年！？

超天然（無自覚の変態）の甘党美少女を筆頭に『エリート班』に集うは個性的すぎる少年たち。子どもたちの手で世界は変えられるのか？そして恋の行方は！？（途中まで全員は出て来ませんのでご了承ください）

承く
ださい
)

プロローグ（前書き）

はじめまして、山本くるみです。

今までにたくさん小説は書いてきましたが長編は初めてです。

とばし読みでもいいので最後までお付き合いいただけると嬉しいですよ。

プロローグは短いですが…。

何かご意見がありましたらどんなことでもいいので教えてください
！！

ブローグ

キレイだ。

それしか言いようがない。

なんてキレイなんだろう。

2096年・世紀末を迎えた現代は昔と何にも変わっちゃいない。散々メディアで未来にはロボットが誕生するだの、不死身になれる薬が開発されるだの騒ぎ立てていたくせに、そんな大層な変化は未来で全く起きていない。平均寿命も昔と同じで、事故が起きることもあれば殺人だって横行している。相変わらず空には白い雲が浮き、地面は黒々としたコンクリートで覆われている。耳障りなクラクションの音と、目障りなすれ違うカップルの繋いだ手も存在している。落ちている煙草を拾っているボランティアの方の足元に、また新しい火の粉が落ちる。

汚い。汚れている。やっぱり何も変わってはいない。当然のことだろう、人間が何も進化していないのだから。

ただ変わってしまったことと言えば、僕の見える世界だ。

新しい世界への境界線をまたいでしまったのは、正解だったのか間違っていたのかわからない。平凡で、平和で、少々退屈でもこれが人生だと思っていた。お嫁さんをもらって子どもが生まれて、老後ゆっくり過ごせたらいいなって、それくらいに思っていた。でも気付いてしまったんだ。

変わらなくてはいけない。世界も、僕自身も。

キレイだ。

それしか言いようがない。

なんてキレイな子なんだろう。

目の前に立つ子を見てそう思う。

“子”なんて言ったら怒られるかな。

目の前に立つ、人間を見てそう思う。

キレイだなんてベタだけど、それしか言い表す言葉が見つからない。

立ち尽くす僕に向かって、

境界線の向こう側で生きる少女はとてもキレイに笑った。

プロローグ（後書き）

後書きを読んでもうださっているということは

本文を読んでいただけたということですよね…！！

感激です（涙

まだまだ意味がわからないと思いますが、

すぐに続きを書きますので！！

また読んでいただけるのを楽しみにしています。

mittion1-1 境界線の手前からの景色（前書き）

またお会いできて嬉しいです。
今回もよろしくお願いいたします。

世の中そう上手くはいかない。

僕はずっとそう思いながら20年以上（正確に言うと23年間）を生きてきた。

僕は学校のクラスで言うによく「あれ？いたの？」と言われるキヤラである。もっとわかりやすくいうと、大きくくしゃみをした時だけやたら注目され、照れたりしたらからかわれるので、教科書を読んでいるフリを瞬時にするというキヤラだ。あれ？わかりづらいかな。それならえーと……。ごめんなさいなんでもないです。

小学校、中学校、高校、大学と中の下くらいの学歴で歩んできた僕だが、とうとう社会に羽ばたく時がやってきた。いつでも慎重に細心の注意を払いながら細々と生きてきた僕。それでもやっと社会に貢献できる日がきたのだ！……とまでは思っていないが、小学校の入学式並の興奮と気恥ずかしさを覚えていた。初めなら誰だつてそんなのかもしれないが、僕は今回誰よりも舞い上がる権利がある。なぜなら、今回の職業は誰でもなれるものではない。僕は人生で初めての「特別」に抜擢されたのだ！！

自分でもどうしてなのかわからない。突然大学の先輩からこの職業を紹介された。その先輩はどうしてこんな普通の大学に来たのだろうと思うくらい頭が良く、卒業前に数々の賞（なんか方程式がいっぱいの論文で）を受賞しており、先生、生徒ともに信頼される、いわゆるモテモテ君だった。そんな僕とは対極の人がなぜ職業を紹介してくれたのかは少し疑問に思うが、そんなこといったらその人と親しい仲にあることさえ疑問だ。

世の中そう上手くはいかない。でも、それは僕の考えすぎだったのかもしれない。人はこうも言う。渡る世間に鬼はなし。

これからの僕は違う。堂々と胸を張って、カッコいい大人になる。
う。

これが大人への第一歩だ！！

とか言いながら前祝いでお酒をたっぷり飲んだ次の日。（もちろん一人で）

今日がその初出勤の日だ。

先輩から貰った職場先への地図とにらめっこしながら、東京の端っこを歩き進める。

僕の就職先。「青少年非行防止委員会」

とても単純な響きだが、立派な公務員、しかも警察関連の仕事である。とは言っても仕事内容は至って簡単で事務的な作業のみ。武道に長けていない僕でも簡単になれるはずである。「青少年非行防止委員会」（では長いのでこれから“子どもの会”と呼ぶことにする）

とは何かというと、その名の通りやり過ぎた子供たちのおふざけを規制するためにある組織だ。基本的に各地域の派出所などで行っている内容だが、もっと過度になった場合のみ子ども会で処分する。

ということ、この委員会は警察庁の中でかなり小さな組織だ。つまり！人員がほとんど割かれていない！上司がほとんどいない！ということになる。おまけに給料は研修期間ゼロでいきなり高額、待遇も寝泊まりOK、朝昼夜ご飯すべて食堂でタダ、おまけに可愛い子どもたくさんいるという最高の条件だ。その代わりこんな好条件で職員が仕事をしているとなると問題になるため、世間には一切知られてはいけない極秘組織として活動している。同じような名前の組織はいくらでもあるが、本格的なものはここだけらしい。もちろん子ども会の存在を誰かに話した時点でクビだ。先輩の話では他言した職員は次の日から行方不明になったとか…。

アレ？もしかして危険か、この仕事。

いやいやいやいや、ないないない。それに僕は気にしてなんかいないぞ。警察庁なのに歩いていたらこんな薄気味悪い建物ばかりの所に迷い込んでいるなんて。

こんな所にあるはずない。うん、何かの間違いだ。

それでも止まるわけにはいかないので僕はさらに足を速める。そろそろ左手首を気にしなくてはならない時間だ。かと言って右手に握る地図を信じないわけにもいかない。一刻も早くたどり着かなくては。

勘違いだといいのだがさっきから同じ所を何度も通っている気がする。まあ、どこも同じような景色だからしょうがないか。古いはずなのに崩れる気配もなく高くそびえるマンションの瓦礫や、何十年も前に廃墟になったであろう平屋などが笑えてくるほどたくさんある。時間が早いのでいいが、夜なんかとても歩ける場所じゃない。「ん？行き止まり…かな。」

目の前に高い塀で囲まれた何かの建物が見えた。時計台しか見えな
いが、校門らしきものが見えるので多分廃校だろう。

「なんで学校なのにこんな高い塀があるんだ？」

そろそろ一人で歩き続けるのが怖くなってきた僕はわざと独り言を言ってみた。

ちようどいいので近くにあった電信柱で住所を確認する。

「ええつと…。ん？デジャヴ？」

その住所はどこかで見たことのあるものだった。確かに、間違いない。
なくどこかで…。

「あつ！……！」

僕は地図の上に目を滑らせ、電信柱に書かれている数字と全く同じ数字を発見した。どうやらにらめっこは僕に軍配が上がったらしい。

「やった！！着いた！！さて、この辺に…。」

その辺りには廃校しか無いことを確認して、僕が落胆することを

3秒前までの僕は知る由もない。

「もしもーし。」

とりあえず目の前にある校門の取っ手をガチャガチャ鳴らしてみ
る。

一瞬猛ダツシュでお家に帰ろうとしたが、よく考えれば僕に後戻り
するなどという選択肢は残されていない。先輩から仕事の紹介があ
ったのは卒業する大分前だったため、就職活動を一切していないの
だ。この仕事から逃げれば僕は多分一生働けないだろう。それに尊
敬する大先輩からの紹介を断るわけにもいかない。

校門は蹴りとばしたらすぐに壊れてしまいそうな代物だったが、僕
は黙って待った。待つと言っても誰も出て来なければいいなと思っ
ていたのだが。しかし少し違和感を覚える。門はすごく老朽化が進
んでいるのに、塀は所々新しく塗装し直しているような部分がある
のだ。おまけにさっきから誰かに見られているような感覚がおさま
らない。

最悪だ、自意識過剰なだけだ、僕みたいな人間がそんなこと考えち
やいけない。

風が冷たい。風が冷たい。風が冷たい。
でも一体どれ位待てばいいんだ？

「すみません！！開けてください。山川太一です！」
なんとなく自分の名前を強調して叫んでみた。

…風が…。

「はい、山川さんですね。こんにちは。」

「うわぁっー！」

目の前に女の人が立っている。というか出現した。

「えっあの…。」

「お待ちしていました。すいませんね、もしかしてずっと前からいました？」

風に彼女の無造作に一つに結んだ髪がなびく。

それにしてもどういうことだ！？瞬間移動じゃあるまいし…。

「一応、確認しますが…「青少年非行防止委員会」の方でしょうか？」

彼女は表情を緩めながら少し小さな声で

「はい。私、青少年非行防止委員会の事務員を務めている、ユリコと言います。

これからはあなたのお姉さんになりますのでよろしくお願いしますね。」

と言った。

お姉さん？上司という言い方を緩和したものだろうか。彼女はお姉さんというには僕とは年齢が10歳以上も離れることになりそうな容姿である。とても真面目そうな雰囲気だが自己紹介はユリコとしか言わないし…。それでも、どんなに怪しくてもやるしかない。

「よろしく願います！！」

「あら、元気がいいわね。それじゃ中に入りましょうか。」

門の中に入るとお決まりのように門が勝手に閉まった。まだ会社の出勤時刻くらいの時間なため“お化け”などという、その、、幼稚な発想に至らなくて済んだ。

「ひゃっ！」

緑のツルに足を引っ掛けて転びそうになる。それもそのはず校庭であつただろう場所は緑が生い茂り、奥の方には池までできてしまっているのだ。だが生物のいる気配は皆無と言っていいほどしない。

「気をつけてくださいね、危険ですから。」

ユリコさん（と呼んでいいのだろうか）は危険だと言いながらも下を気にせず淡々と歩いていく。

「慣れてらっしゃるんですね。」

「毎日ここを歩いていますから。山川さんもすぐに慣れますよ。と

「いつか慣れてもらわなきゃ困ります。」

「はあ、そうですね。」

「僕は何か一番聞かなければならないことを忘れている気がする。一番重要で、一番疑問に思ったこと……。頭が混乱して上手く働かない。」

「あつそうだ！」

「ユリコさんが僕の大きい声に反応して顔を引きつらせる。独り言を大声で言ってしまう癖は直した方がいらしい。」

「すいません、本当に本部ってこんなんでしょうか？」

「ユリコさんは少し僕の表情を窺ってから、クスリと笑った。」

「はい間違いないですよ。本部……。というか、まあその……。行けばわかります。」

「僕の一番嫌いなワードを口にされてドキリと心臓が鳴った。「行けばわかる」とか「後のお楽しみ」などと言われるのは恐ろしくてしょうがない。もちろん良い意味でのサプライズということもあるのだろうが、目にするまで何かわからないというのは恐怖に値する。それにこの場合、一つも良い予感がしない。絶対に何かあるだろう……！」「ふふっそんなに身体を強張らせないで下さい。メンバーに笑われますよ。」

「そこで歯をキツく食いしばっていたのに気付いた。人間の本能というやつだ。ならここは男らしく（昨日と同じようなノリで）宣言しておこう。」

「大丈夫ですよ……！大したことでない限り驚きませんから。」

「ユリコさんはやっとたどり着いた、学校の玄関らしき扉に手をかける。」

「驚く？驚くならまだいいですよ。逃げ出さないで下さいね。」

「玄関らしき所に入るとそこは薄汚い下駄箱がずらりと並んでいた。……と思ったのに真新しい銀色のロッカーが並んでいる。」

「えっこれは…。」

校舎を見渡すとどこも会社のビルのような内装になっているのだ。廊下は薄黄色のカーペットで、壁はスカイブルー。天井なんて必要以上に高いし、あんなに汚いと思っていた窓も、なぜか中からはちゃんと外が見える。その窓も壁の色々な所に色々な形であり、オシヤレな高級マンションの一室という表現が一番ぴったりかもしれない。

「どうして中はこんなに新しいのに、外は綺麗にしないんです？」

「どうしてだと思えますか？」

質問返しをさせるのは慣れていないので戸惑ってしまう。

「ここは青少年非行防止委員会ですよ。周りから目立っては困るんです。」

僕は先輩から言われた言葉を思い出す。

「ああ、この委員会の存在が周りにバレたらいけないでしたっけ。」

「その通りです。だからあなたに校門で大声を出された時はもう本当に…。」

ユリコさんは口をつぐむと僕の方を向かずスタスタと歩き出した。

「他に何か質問は？もう担当の部屋まで行きますよ。」

質問？そんなもの山のようにある僕は慌てて口を開く。

「それじゃっ、あの、さっきからまるで人のいる気配がしないのですが。静かですし。」

こんなにたくさんの教室（部屋？）があるのに物音一つ聞こえてこない。

「ここにある壁は特殊加工されています。中からの音は外に全く聞こえませんが外からの音は中にいる人に聞こえるようになっていんです。」

自分たちの話し声は聞かれているのに自分は聞けないなんて少し嫌悪感を覚えたがそれなら納得できる。薄汚れていたはずの窓もわざと外から見えないための工夫なのだろう。

「すごいですね、そんなものが日本では開発されていたんですか。」
「日本？開発したのは私たち…というか委員会のメンバーですよ。」
「そうなんですか！すごい人たちなんですね。」

ユリコさんは僕の言葉を聞いて満足気に頷いた。

「ええ。すごいですよ彼らは。すごいどころじゃないです。」

僕がすごいという表現しか使えていないのをユリコさんは面白がっているようだった。

「もうすぐ着きますよ。」

「ちよつちよつと待つてください。」

僕は螺旋状になっている階段（なぜ中央階段が螺旋階段になっているかをつつこむのはもうやめた）の手前で無理やり止まった。

「聞きたいことは山ほどあるんです、お願いですからゆっくり話させてくださいっ！」

自分の息が少し弾んでいるのに気がつく。ユリコさんは見かけ以上に歩くのが速いのだ。

「質問があるのならどうぞと言ったはずですが。」

時間がないのか明らかに口調が冷たくなっている。

「それなら今させてもらいます。まず、さっきから気になっていたんですが、クラスの表札の所に“15班”とか“14班”って書いてあるじゃないですか。班って何ですか？」

「班は委員会で調査、または処分・処理する際のグループです。一班5 8人で構成されています。その他に私たちのような事務員23人いますが、ちなみに全部で15班あり、数字が上になるほどエキスパートということになります。」

「つまり、1班が一番すごいと？」

また「すごい」と言ってしまったので顔が赤くなる。

「そうです。1班だけは格が違います。」

1班のメンバーを想像する。非行少年を束ねるエキスパート…。ダメだ、マツチヨの男しか出て来ない。

「それじゃ、僕はどの班に行くんです？」

少し空白（マッチョを想像している間）が空いてしまったため、ユリコさんは階段を上り始めてしまった。

「1班です。」

「へ？」

我ながら間抜けな声を出してしまった。

「あなたには1班、通称“エリート班”の事務員を私と共にやっていただきます。」

「エリート班？」

マッチョを想像していたが、プラスで眼鏡も必要らしい。

「平気ですよ、みんな優しくて明るいんですから。イカつい男集団でもないですし。」

僕の思考は完全に読まれているようである。

「そんな所に配属なんて…僕には…その、無理じゃないでしょうか。」

「

「私もそう思いますよ。」

あまりにもキツパリと言われてしまった僕は少したじろぐ。

「でも無理か無理じゃないかを決めるのはあなたの意志ではありません。後であなたの身体に決めていただきますから。」

螺旋階段で目が回っていた僕はユリコさんの最後の言葉がよく聞き取れなかった。

「着きましたよ。最上階“エリート班”専用の場所です。」

多分7階であろうその階は、先ほどまでと空気が違うのに僕でも気付いた。

「こんな広いのになった1班で使っているんですか。」

「他の部屋も別の用途で使われていますが…基本そうですね。」

先をずっと急いでいたはずのユリコさんは今度は部屋に入るべきか思案している様子だった。

「いいですか、山川さん。」

初めに会った時と全く違う、凛々しい女性の目が僕に向けられた。その様子を見て彼女は先生が生徒に話す口調のようにゆっくり、は

つきりと言った。

「逃げないで下さい。」

「…。」

僕は顔を上げて自らクラスの扉の前に立つ。僕にだってわかっていた。おかしすぎる。こんな非公式な仕事が存在するはずない。扉を開けたその世界が危険だつてことわかってる。入った瞬間殺されるかもしれない。何か危険な依頼を僕自身がやらなくてはいけないかもしれない。それでも僕は自分の手が扉を叩くのを止められなかった。

「失礼します！」

扉を勢いよく開けてから一瞬目つぶって呼吸をする。

「これから事務官を務めます、山川太一です！よろしく願いしま
…。」

僕はその続きを言うことができなかった。

だってそうだろう？

1班の人が顔を上げて初めて気付く。

そこにいるのは全員「子ども」だったのだ。

mission 1 - 1 境界線の手前からの景色（後書き）

イイところで区切ってしまいました；
やっとあらすじの内容ぐらいの本文に
なりましたかね…。
お目汚し失礼いたしました。

mittion 1 - 2 (前書き)

誤字脱字があるかもしれません。
まだ女の子は出て来ませんが、
どうかお付き合いくださいます。

「なっ…。」

僕は全身に電気が流れるような感覚を覚えた。真っ白な部屋の中で僕は黒目を痙攣させる。なぜなら目の前にいるのは最強の大人ではなく、ただの子どもなのだ。しかも未成年というレベルではない。どう見ても高校生くらいである。一人は熱心に塗り絵に取り組み、一人は漫画を笑顔で読んでいる。もう二人はチェスで勝負をしているようであつたが…。

「あれ？誰このオッサン。」

奥からニット帽を深くかぶったボサボサ頭の少年が出てきた。皺だらけの黒いダボダボのチェックシャツが生活感を漂わせている。

「オッサンって…。それより君たちはっ、そのっ、どうしてこんな所にっ。」

すっかりテンパってしまった僕はこの黒ぶちメガネの少年にさえ口を上手くきけない。

「どうしてここに？ここが家だからに決まってるんだろ。」

「家？」

後ろにいるユリコさんの笑い声を聞いて僕は合点が合った。

「ああそっか。君たちはこの人たちに連れて来られた少年たちか。」

非行少年を取り締まるのが仕事のここなら、子どもを引き取るにとくらしいしそうである。

ところがユリコさんは笑うのをやめて部屋に入ってきた。

「みんな紹介するわね。この人がこれからあなた達の事務員を務める山川太一さんよ。」

僕は口をもごもこと動かすことしかできない。

「何言ってるんです？僕は1班のメンバーの事務員では…。」

「だから言ってるじゃない。ここにいる1班のみんなの事務員よ。」

「えっ…。冗談ですよね？」

さつきからタメ口になっているユリコさんは下に落ちたトランプを拾い上げた。

「こらっダメじゃない、凶器をこんなところに捨ててたら。」

「凶器？」

「トランプの片方の側面がカッターになっているの。」

「カッター！？どうして…。」

もう何がなんだかわからない。えっ？はあっ？

黒いソファアーチエアに座っている五人は、表情がコロコロ変わる僕に目をくれもしない。

「ユリコさん…。」

「ふふっごめんなさいね。そんな涙目やめてちょうだい。でも私、戦闘員が大人だなんて一言も言っていないわよ？」

「戦闘員…。」

戦闘員って戦うってこと？こんな子どもが…。

「こんな子どもが戦うくらいなら、武道無経験の僕にだってできるような簡単な仕事なんじゃないかな？」

「え？」

「貴様、今そう思っただろう。」

声の主はチェスをやっている薄茶色の髪をした少年だ。

「チェックメイト。今回は俺様の勝ちのようだなハハッ！」

「自分から「今回は」って言っちゃう奴に高笑いされてもムカつかないけど。」

薄茶色の髪の少年はグルリとチェアを回転させて僕を見る。

「想像通りの外見、想像通りの反応だな。残念ながら貴様が思っているような簡単な仕事など俺様たちは引き受けていない。」

「ちよっと待って、貴様って僕のこと？」

ユリコさんは書類に目を通すのに忙しいようなので、僕自身で彼らの対応することに決めた。

「怒るところそこですか、山川さん。この馬鹿が言うことは気にしないで下さい。自己満足ですから。」

「あん？なんだとコラ。」

「はあー…自分の気持ちを読み取られたことに触れないってことは、事実だから深入りされたくないってことですか？」

「えっ気持ちを読み取る？さっきのは僕をおちよくって言ったただけだろう？」

「どうやったらこんな状況でそんなポジティブな解釈ができるんです。」

銀ぶちメガネで短髪の少年は、チェスのナイトを手でいじりながらため息をつく。

「ユリ姉、この人がここに入るのは決定事項なんだろう？」

「ええ、一応ね。」

すっかり仕事に夢中になっているかと思いきや、素早い返答が返ってきた。

決定？そんな、僕はこんな仕事できない。

「それなら俺たちのことを知ってもらえばいい。そしたらこの状況を理解できるだろ。」

短髪の少年はジャケットの中に手を入れる。

何か深入りする前に逃げなくては。こんなことやってられるか！

「動かないで下さいよ、死にたくなければ。」

するとさっきのランプが宙に放り出された。

「？」

—ヒュンッ

「！？」

—ズボッ

一瞬の出来事に足がすくんだ。一時停止しているのは僕だけで子どもたちは平然としている。ゆっくり、ゆっくりと振り返ると自分のギリギリの壁にランプが棒状の物によって突き刺さっている。

「どうどうしてクナイが…。」

「俺は木影ヒカル。木影流忍者の子孫だ。」

は…ははははは。

「ひっヒカルくん？そのあの…どうということ？」

「どうということも何も…。」

ヒカルくんはジャケットのボタンをはずすと、内側を見せるように僕に向かって開いた。

「こうということだけど。」

そこにはぎっしりクナイが収納されている。

「どうして…。」

「ああ手裏剣は好きじゃないんだ。クナイの方が実用的だしな。」

「そうじゃなくて、どうしてクナイなんか…。」

「俺は戦闘員の中で主に敵の動きを封じたりする役回りだからだ。」

こういったものがあつた方が便利だろう。それに先祖の血を有効活用しない手はない。」

さっきの忍者の子孫という話を僕が信じている前提で話が進んでいる。

どうしよう、どうしよう。全然ダメだ、理解できない。

「ハッハー！おい、理解できないってよヒカル。」

茶髪の少年は意地悪そうに笑う。

「いつまで俺様のこと茶髪の少年って呼ぶつもりだ？これからは天地イク様と呼べ！」

またしても心の声を読み取るかのような発言にちょっと苛立ちを覚えた。

「どうして茶髪の少年って呼んでるってわかるの？」

「俺様は人の心が読めるからに決まってるだろう！」

すると後ろの方にいるマンガを読んでいた白衣姿の男の子が立ちあがった。

「ふふっ誰でもわかりますよ。さっきから太ーさんイクの髪ばかり見ていましたから。」

イクくんが舌打ちをする音を聞いてヒカルくんは嬉しそうにして

いる。

白衣の男の子は僕の方へまっすぐ歩いてきた…と思いきやストーブの電源を消しにきただけらしい。

「そろそろ換気をしないと。」

「あの…君は…。」

白衣の男の子は柔らかそうな髪を揺らして、初めて好意的ともいえる笑顔を浮かべた。

「星島リウっていいいます。この中では医療担当です。」

医療？あまりにも見たままなので口角が上がってしまう。

「すいませんね、みんな個性的な人たちばかりなので。でもいい人たちなんですよ。」

「あの、医療って何をするんですか？」

リウくんにつられて僕も敬語で聞いてしまった。

「みんなの健康管理や、怪我などの応急処置ですよ。他にも容疑者や被害者のけがの具合などを調査する時も俺ですが。」

容疑者？被害者？訝しい単語が出てきたと思いつつ、リウくんは普通に優しそうなので心がやっと落ち着いた。

「ほら、マコトも挨拶したら？」

リウくんは塗り絵をしている少年に声をかける。前髪はつつんが印象的のこの少年はこの中では一番若そうだった。

「今忙しいんです。後にしてもらえますか。」

あまりにもキツパリと滑舌良く返事をしたので、見た目以上に大人らしいことを知る。ひたすら色鉛筆を動かす少年はある意味忙しそうに見えた。

「ねえ何の塗り絵をしているの。」

「塗り絵じゃないですよ。定理の証明です。」

数学で聞いたことのあるような単語が小さな少年の口から出てきてびっくりする。

「四色定理ですよ、知らないんですか？」

「四色定理？もしかして四色問題のこと？」

「ああやっぱり知ってるんじゃないですか。」

もう僕との会話を終わらせたつもりなのか、また新しい色鉛筆に手を伸した。

「おい、クソガキ、絶対そいつわかってねーぞ。」

「知ってますよ、でも説明するの面倒ですし。」

四色問題という名前しか知らなかったことが子どもたちにはバレバレらしい。

「説明してほしいですか？」

「あついや…それより君自身の説明がほしいんだけど…」

気まずいので遠慮がちに尋ねると、黒く大きい瞳が僕の目と交わった。

「風宮マコト、14歳です。情報担当をしています。」

14歳！？中学2年生じゃないか。

「情報？」

あくまで平静を装いながら聞き返す。

「戦場では情報が命を左右するんです。班長に的確な指令を出していただくために僕がすべての情報と、すべての可能性を散策します。そこにあるパソコンが僕の相棒ですよ。」

全然意識していなかったが、近くに薄っぺらい黒い板が座っている。

「へえ…それは、あれかな。ヘッドフォンマイクかなんか付けてやるんだよね。」

「はい？」

マコトくんは1度考えてから声を出して笑った。

「そうです、そうです。ははっ。へえ、結構面白い人じゃないですか。」

「うっははは…」

明らかに子どもに見下されている。僕の方が果てしなく立場が低い。もうどうすればいいんだよ！それでもみんな僕の方にやっとなを向けてくれたようだ。気が向くというか、好奇心の塊を向けられて

いるだけのよう気がするのだが。

「…さつき班長って言ったけど誰がそうなの？」

「ああ紹介まだでしたもんね。」

マコトくんは部屋をぐるりと見回してから、何かを見つけたよう
でぱつと顔が華やぐ。

「僕らの班長であり『青少年非行防止委員会』の会長にあたる空見
レイ先輩です。」

レイ？女の子なんかいたっけと思いつつみんなの視線の先をたどる。
「あつはじめの…。」

視線の先にいるのは深くニット帽をかぶったあの少年である。眠
っているのか小さくかがんでいるので存在を忘れていた。

「どうしたんです？」

「いや、女の子かと思ってね。」

「でも先輩、カッコイイでしょ？」

「そ、うだね…。」

なんだか男の子が男の子のことをカッコイイと言うと生生しく感
じてしまう。

「会長かあ…でも意外だな…。」

オッサンと言われたことを少し根に持っていたからか、そんなこ
とを言ってしまった。

「山川さん、レイのことナメてると痛い目にあいますよ？」

「リウくん。」

「レイは僕らとは比べものにならないくらいの力を持っていますか
ら。ふふっ残念ながら僕なんかレイの足元にも及びません。」

「おい、何だその言い草。俺様が雑魚だとても言いたいのか。」

「そんなんじゃないよ。でも事実じゃない？」

「僕もレイ先輩には敵いません。…他の人には負けない自信はあり
ますが。」

「何か言ったか。」

「いえ、何でもないですヒカルさん。」

みんなただ自分の意見を言うだけで、結局レイくんが何者なのか教えてくれない。

全員性格がバラバラのためか仲が良さそうには見えなかった。それにしてもこんな状況の中眠れるレイくんって何者なんだ？あ、すごいのはそんなところじゃないんだろうけど。

「IQ209の天才よ。」

思いがけなく書類の整理を終えたと思われるユリコさんが口を開く。

「青少年非行防止委員会の人間兵器と恐れられ、闇社会では『天から来た悪魔』という異名を持つ世界最強のキッズ。」

「悪魔…。」

レイくんの横顔と僕の手を見比べる。

「その異名の由来はすぐにわかるわよ。仕事は毎日山ほどあるんだから。」

「僕には無理です。」

「え？」

僕は持ってきた黒革のバッグを肩にかける。

「はつきり言って信じられない。こんなの…非現実的すぎる。どうして子どもが戦っているんです？戦うって何と？もっ…。」

息が切れる。脳に酸素が回らない。

「太一さん。」

「僕は普通の仕事をしに来ただけです。危険な仕事に巻き込まれる筋合いなんて一つもない！」

沈黙が流れる。

僕は自分で何を言い出したのかよくわからなかった。でも今言わないとこのまま流されてしまう気がしたのだ。

ユリコさんはまつ毛を下に向けてから、外に出て行った。本当は一人にしないでほしかったが、呼びかける気も起らない。元はと言えば彼女のせいなのだ。こんなの詐欺じゃないか！今すぐ帰ろう。帰って就職活動をしよう！

「じゃあ、聞きますけど。」

マコトくんが冷たい眼差しを僕に向けた。

「なんで僕たちの自己紹介最後まで聞いたんです？」

ああそうだ、どうして最後まで聞いてしまったんだろう。

「おもしろかったんでしょ？子どもなのに危険な仕事をしているのが。信憑性が出てきたら終わりにするんですか。」

彼の目を見ることができなかった。

確かに興味本位もあつたかもしれない。それでも自分の言っていることが間違っているとは思わない。大人なら誰だって同じような行動をしただろう。それをこんな子どもに偉そうにー！

「さっきの質問に答えましょう。僕たちが何と闘っているかでしたっけ。」

。

「アンタみたいな汚い大人ですよ。」

急に全員の顔から笑みが消えた。腰が引く。

怖い？僕は子ども相手に恐怖を感じているのか。

「青少年非行防止委員会って名前の意味わかりますか？青少年の非行を防止する委員会。そのままですけど、ここで指す『青少年』って誰だと思えます？」

聞きたくない。怖い、怖い、これ以上知ってはいけない。

それでも身体が動かない。どうして、子ども相手なのに。

「はあ、知りたいようですよレイ先輩。」

急に人間兵器の名前を口にされ顔が引きつる。

「ふわあゝそろそろ時間？」

少年は大きく伸びをすると、口元を手で押さえながら立ちあがった。椅子にかけてあるイヤホンを掴むと扉に向かって歩き出す。

「やっぱり起きてたんじゃないですか、演技も上手いですね、先輩

。」

「そりゃ、起きてそいつの相手をしなくちゃいけねーのダリィし。」
白い歯を少し覗かせると、僕の肩に手を置いて耳元で囁く。

「これから仕事なんだけど、付いてくる？」

首筋に寒気が走る。寒気を通り越して恐怖そのものが走り去った
ような気分になった。

「僕は…。」

今すぐ帰るに決まってるだろ、と言おうとして口が止まった。舌
から水気が引く。

「帰りたいなら帰っていいけど？」

少年の顔が数センチのところにある。身動きが取れない。

「これはアンタが決めることだからさ。ね？」

自分の目が燃えるように熱くなる。

「…かわ…は…に……ない。」

「っ？」

「山川太一は絶対に帰らない。」

無声映画からいきなり声が出てきたような感覚に襲われた。

彼は瞬きもせず口を動かす。

「山川太一は絶対に帰らない。」

彼はくり返した。くり返した？実際は口パクでもう一度言っただ
けだ。それでも鮮明に音が聞こえてくる。

しばらくして風の音が初めて聞こえた。ような気がした。僕は今、
どうしてここにいる？

帰らない。帰れない…。帰りたくない？

宙がひっくり返る。地面がすっぽりと抜け落ちた。

僕は何のためにここへ来たんだっけ？

目をつむるとそこは暗い暗い世界の奥底だった。

「はっ！！」

気付くと僕は暗闇ではなく車の中にいた。車？動いている？

口の中が渴いている。少しの間の記憶がない。僕は寝ていたのか。それじゃ、あの子どもに囲まれているおかしな光景も夢だったんだ。そうだよな、子どもが戦っているだなんてそんな馬鹿げたことがあるはずがない。

「はははっはははは……。」

もう立派な大人の僕が、夢にうなされていたなんて恥ずかしいことだと思う。でも覚めてくれて本当に良かった……。

「何笑ってんだあ？起きたならさっさ準備しやがれ。」

「……………」

夢じゃねえええエエ！！

あつ僕なんかおかしくなってる。これも夢だ、というか夢だと言ってくれエエエ！！

「だから夢じゃねえって。俺様が夢ごとテメエを叩きのめしてやるうか、アン？」

「ちよつとやめてよイク。車の中狭いんだから。はい、これお守り。」

「

どういうことだ？僕は帰ったんじゃないのか？何で子どもたちと一緒にいる？

僕は車の最後部座席にいるらしく、慌ててバックミラーに目をやる。運転しているのはユリコさんだ。僕が起きているのを知ってか知らずか何も言わない。

「……は……は……。」

車の窓が特殊加工されているせいか入ってくる光が極端に少ない。もう真つ暗だ。なんだ、結局、暗闇の中にいるじゃないか！！

「あのっ降ろしてくださいっ無理ですからっ早く！！」

「あんたがここに居るのは班長のせいだからな。俺たちの意志ではない。」

黒く扮装したヒカルくんがご親切に回答してくれた。

「班長があんたに軽い催眠術をかけたんだ。『山平太一は絶対に帰らない』ってな。」

それならまあ納得がいく。とりあえず僕の意志で来たわけではないことが判明してほっとした。…っていかー！！催眠術！？

「催眠術なんて大袈裟なものじゃない。ただ、調教しやすい体質っぽいから軽い暗示をかけてやっただけだ。」

助手席から声が聞こえて、また背中に悪寒が走る。僕はどうやら彼が苦手らしい。

「それよりマコト、情報^{ネタ}は？」

「ちよつと待つてください。ユリさん、ここ電波悪いです。」

「チツ。わーったよ、次の信号右折すりゃーなんとかなんだろイ。」
え？今の誰の声？

「ああ、ユリさんはハンドルを握ると性格が変わっちゃうんです、ふふつ。」

「おーらあ行くわよっ！！！」

「ひゃっ！」

勢いよく右折したせいで危うくイクくんを抱きついてしまうところだった。なんとかイスに重心をかけたものの、イクくんの手が頭がぶつかった。

「うわっ！おい、俺様のお守り落としてんじゃねーぞ。」

「ごめっ…。」

俺様キヤラでもお守りなんか頼るんだなあ、と思いつつイスの下に顔を入れる。

「あれ？お守りなんかないよ。」

「はあ？ねえわけねえだろーが。」

「だって何も…おもちゃのピストルならあるけど。」

「それだ、お守り。さっさと拾ってくれ。」

「何でこんなオモチャ…。」

「ハイどうぞ。」

「ああ御苦労さん。んア？おいリウ、弾が入ってねーぞ！」

弾？弾？エアガンのアレみたいなのやっ？ダメだ、おかしいことは考えちゃいけない。こう見えても彼らは中高生…。

「だからお守りだつて言つたじゃない。そんな撃つ氣満々でいつちやだめだよ。」

「弾が入ってねー拳銃に何の意味があんだ！せつかくボディは最新型なのによ。」

「けけけ、拳銃？」

「せんぱーい、電波回復しました。」

キーボードを叩く音が規則的に車内に響く。

「準備いいですか？」

「うん、いいよ。」

「完了だ。」

「ふははっどんと来やがれ！」

「……どぞ。」

僕はもう逃げ出す氣力さえ失つていた。逃げられない。逃げてもどうにもならない。

それよりも興味が湧いてきてしまった。汚い大人だと言われてもいい。何も無いはずの真つ暗な空間の中で、何かが淡く光り出した氣がしたのだ。

「それじゃ。」

……？全員の呼吸が一瞬止まった……！？

「ここより2080m先、白沖海岸近くの第18倉庫に、大勢の若者が月に1度集まつて何かをしているとの通報が1か月前に有り。

具體的に何をしているかについては情報はないですが、恐らく麻薬の売買と思われます。」

「根拠は？」

「倉庫内から度々狂つたような声や、唾液を垂らしながら暴れている男もいたというので。海岸に近いたため外国船からの輸入がしやすいです。謎の船も何度か目撃されています。」

「船が目撃されているのに捕まらないってことは、政府絡みか。」

「いえ、今回は漁獲を行いながら密輸もしているという線が一番濃

さそうです。」

「その定期売買の日が今日ってこと？ 唾液を垂らして暴れるってことは、相当依存性が高いね。何力月前から？」

「目撃は5力月前からです。今まで通報しなかったのは報復を恐れてのことだそうで。」

「はあ… 早めに言ってくれりゃ俺様達の仕事も減るっつーのに。」

「人数は大体30人程度らしいですが、月によって人数が違ったりするのでわかりません。さつき写真を解剖したのですが、年齢層は若くて17歳、上では28歳だと思われます。とりあえず黒いコートを羽織った男がボスらしいです。写真はありませんでしたが。」

「黒いコートねえ… 倉庫と周辺の環境は？」

「人通りはほとんど無いようです。まあ野次馬もいるそうですが、倉庫の大きさは白沖海岸の倉庫群の中では大きな1番巨大で、えっとなさうですね、教室7、5個分くらいの大きさです。入り口が海岸側に1つ、通常の出入り口が逆方向に2つ、2階も少しだけスペースがあるので海岸側の角に梯子が1つあります。近くに爆発する危険性のあるものはなし、ただし管制室が奥にあるのでそこでは暴れないようにしてくださいね。」

「管制室では何ができるんだ？」

「大扉の開閉や、照明の明るさを調節したですかね。それを利用して一般人を入れないようにしていたようです。」

「犯人が所持していると思われる凶器は？」

「さすがに拳銃を撃つたら音が大きいですから気付かれると思うんですけど、それらの情報は全くないですね。倉庫近くの木の下が、何かで傷つけられた後が無数にあるというので、刃物類などは所持していると思います。」

「ん？ どれどれ…。ああ、そりゃ間違いなくサバイバルナイフだ。気をつけた方がいいな、結構大型だぜ。」

「以上が現在の情報です。」

目が回った。なんだ、今何が起こっていた？呼吸することも許されない、高密度の中で何かが、何かが、起きている。

「残り2分43秒で到着します。もうすでに集会が行われている時間ですね。」

どうしてそんな情報がわかるんだ？マコトくんのパソコンに映し出されているのは何枚かの写真と、真っ黒な背景に白い文字が羅列されている画面だけなのだ。

「レイ先輩、指揮を。」

サイドミラーが妖しく光る。レイくんが笑ったのがわかった。

右手が僕の意識とは関係なく震えている。誰にも気づかれたいくないので右手に左手を重ねたが、左手も震えているので意味がない。他の人たちはそんなことも気付かず、レイくんの言葉をただ待っている。

「…夕焼けだ。今日は月がきれいに見える。」

「えっ？」

この緊張感に不似合いな文章が聞こえ、思わず僕が声を出してしまった。

レイくんは髪を指で乱す。その時また全員の息が消えた。

「前々回と同じ作戦で行く。担当を同じように分けるぞ。ヒカルは裏口をこじ開けて管制室へ行け。入るタイミングはヒカルに任せる。」

「ああ。」

「イクとリウは正面突破だ。もちろん下調べはしてから行け。」

「はい。」

「おう！」

「マコトは倉庫の周りを巡回して、ネズミー匹逃がさないようにしろ。わかった情報は全てマイクを通して伝えるように。」

「了解です。あれ、先輩は？」

「ああ、忘れてた。イクとリウと共に行動する。」

「ふふっ、レイがいたら俺らの出番ないかもね。」

「んなことねーだろ！ぱーっと暴れるぜっ！！」

「暴れるのは構わないけど、銃を暴発しないでよ？」

「あと、ユリさんは倉庫周辺、及び近くの道路を車で巡回して目撃者を最小限に抑えて。」

「任しときなさい！」

「それと、」

着々と準備が整っていく。くそう、あと何分だ？もしかしたら車からみんなが降りる際に、全力で走れば逃げられるかもしれない。でも白冲海岸？聞いたことがない。帰れるかな…。

「最後部座席のオッサンは、マコトと一緒に行動しろ。」

とりあえず駅に行けばなんとかなるか。でもあれ、財布どこだ。しまったバッグが！

「オッサン？」

くそお、どうすれば…。ってえ？

「オッサンって僕に言ってる？もしかして。」

「アンタ意外にオッサンと呼ばれる人間は乗車してないだろ。」

「そういう問題じゃなくて、何で僕も行くんだよ。」

事務員だからと言われても僕は動くつもりがなかった。そもそもまだ仮入社だ！多分。

「『青少年非行防止委員会』の“青年”が誰を指すか気にならないの？」

「え、あああの質問か。」

すっかり忘れていた。

「その狂暴な麻薬中毒者達だろう。そんなの見に行っても危ない…。」

「人は危険を冒してから、初めて“答え”を見つけることができるんだ。」

助手席からシートベルトを外す音がした。

「全員イヤホンとマイクを付ける。汚いオッサンに自分達の“答え”を見せに行くぞ。」

「了解！！」
ランジャ

どつやら僕には行くしか道は残されていないようだ。

mission 1 - 2 (後書き)

見てくださってありがとうございます。
アクセス数はかなりあるのに、
感想などが無いのが残念です…。
要望などがあつたら取り入れたいので
どうぞよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7324k/>

エリート キッズ

2010年10月28日08時39分発行